

(訳)坂田 孝三 氏 【佐久歴史の道案内人の会 幹事(教育担当)】

内山峽 うちやまぎょう

裏山蜿蜒として波浪の如く じょうざんえんえん はろうのごとく

西は信山に接して相い送迎す にし しんざん せつ あいそうげい

奇険なるは就中は内山峽 きけん なかんづく うちやまぎょう

天然の崔嵬刃り成すが如し てんねん さいかいけず なご

刀陰の耕夫 青淵子 とういん こうふ せいえんし

販鬻 信に向つて路程を取る はんいく しん む ちよてい ろてい と

小春初八 好風景 しょうしゅんしよはつ こうふうけい

蒼松 紅楓 草鞋軽く そうしょう こうふう そうあいかろ

三尺の腰刀 棧道を涉り さんじやく ようとう さんどう わた

一卷の肩書崢嶸をは攀づ いっかん けんしようそうこう よ

涉攀すること益々深くして、険弥々酷しく しよはん ますますふか けんいよはなはだ

奇巖怪石、磊磊として横たふ きかんかいせき らいらい よこ

上州の山々は龍や蛇がうねりながら動くような、波浪にも見える。西は信州の山に接して互いに送り迎えしている。

とりわけ奇妙で険しいのは内山峽である。

天然の山はむっくりと高く、ごつごつとし高く険しく、岩をえぐるがごとき景色である。刀陰(利根川の南)の農民の私青淵はこれから藍玉の商売のために信州に向かって行く。

時は十月八日の小春日和の好い風景

松は蒼く、楓は赤く、わらじ履く足取りも軽く

腰には三尺の刀を差し、棧道を辿り溪流を渉る

一卷の本を肩にかけ、ぎざぎざと乱れたつ山をよじ登り

溪流を渉り岩を歩くと山は益々深く、険阻な道いよいよ

厳しく 奇岩怪石がゴロゴロと横たわっている

勢は青天を衝き、臂を攘って躋り

気は白雲を穿ち、手に唾して征く

日未牌に亭りて絶頂に達すれば

四望の風色、十分に晴る

遠近、細かに辨ず、濃と淡と

幾く青、幾く紅、さ更に渺茫たり

始めて知りぬ、壯観の奇険に存するを

真趣を探り尽す、游子行く

恍惚此時、得る有るを覚え

慨然として掌を拍ちて歎一声す

君見ずや、遁世清心の士

気を吐き、露を呑み、蓬瀛を求むるを

又、見ずや、汲汲たる名利の客の

勢い(意気)は青天を衝き、腕を振って山を登る

気(詩心)は白雲を穿ち、手に唾をして行く

太陽は未だ標識を照らして、頂上に立てば

四方の景色十分に見え

遠近とも詳細に見える。濃い薄い

幾く青く幾く紅く、さらに広く果てないさまを

初めて知った壯観の奇険のあることを

心の向くところ探り尽くすこと目的とした旅人は行く

うっとりしたこの時、得る有るを覚え

胸がつまって手を打ち声を発した

君は見たか俗世との関係を断って静かに暮らす清心の士を

気を吐き露を呑み、蓬萊山瀛州山の仙人に求めること

また、見たかせかせかとした名利の人を

朝あさに奔はしり暮くれに走はしりて浮ふ栄えいを趁おうを

中ちゆう間かんに大たい道どうの存ぞんするを識しらずして

徒いたに、一いち隅ぐうを將もつて終しゆう生せいを誤あやま

大たい道どうは由ゆ来らい随ずい処しよに存ぞんし

天てん下かの万ばん事じは誠まことに成なる

父ふ子しはこ惟これ親しん、君くん臣しんは義ぎ

友ゆう敬けい、相あい待まつ弟ていと兄けいと

彼かの輩はいの著ちやく眼がんは此これに到いたらず

憐あわれむべし自みら人にん情じゆうに払もとるに甘あまんず

篇へん成なりて長ちゆう吟ぎんすれば澗かん谷く応おうじ

風かぜは落らく葉ようを捲まきて満まん山ざん鳴なる

朝に走り暮に走り、はかない世俗的な栄華を追うを

中間に大道の在るを識らずして

いたずらに、一隅をもつて終生を誤る

大道の由来は随所にある

天下の万事は誠である

父子はこれ親、君臣は義、

友は敬、相待つ兄弟

彼の輩の目立ちすぎる眼はこれに至らない

憐れである。自ら人情に払うるに甘んず

漢詩ができて長吟すれば谷川が応じ

風は落ち葉を捲いて山全体が鳴る